

## O-145 核グレード(腫大)を利用した小型肺腺癌の悪性度評価

中里 宜正<sup>1</sup>・南 優子<sup>1</sup>・小林 弘美<sup>1</sup>・穴見 洋一<sup>1</sup>  
野口 雅之<sup>1</sup>・蔦 幸治<sup>2</sup>・呉屋 朝幸<sup>3</sup>

筑波大学大学院 人間総合科学研究科<sup>1</sup>；国立がんセンター中央病院 臨床検査部<sup>2</sup>；杏林大学付属病院 外科<sup>3</sup>

2cm 以下の原発性肺腺癌症例を対象に腫瘍細胞の核グレード(腫大)による悪性度分類の可能性を追求し、悪性度分類の基準値の定量化を試みた。1993 年 1 月から 2000 年 12 月までに国立がんセンター中央病院で施行した 2cm 以下の原発性肺腺癌手術症例 133 例の切除検体での腫瘍最大断面のプレパラートをを用い検討した。腫瘍細胞核の測定には Image Processor for Analytical Pathology (IPAP；住化テクノサービス(株))を使用し、腫大した核を 5 視野 50 個描出し、面積、周囲径、類円率、長軸径を測定した。Receiver Operator Characteristic curve (ROC 曲線) から予後不良群が抽出可能な測定値を推定し、Kaplan-Meier 曲線から生存率を求めた。症例の内訳は男性 64 例、女性 69 例、年齢は 38 歳から 82 歳、平均  $60.5 \pm 9.8$  歳であった。野口分類では Type A 12 例、B 14 例、C 66 例、D 27 例、E 8 例、F 6 例であった。測定結果は核面積の最小値  $34.3 \mu\text{m}^2$ 、最大値  $107.2 \mu\text{m}^2$ 、平均  $62.0 \pm 16.5 \mu\text{m}^2$  で、核長軸径は最小値  $7.5 \mu\text{m}$ 、最大値  $13.3 \mu\text{m}$ 、平均  $10.2 \pm 1.4 \mu\text{m}$  であった。ROC 曲線の曲線下面積は核面積 0.754、核長軸径 0.735 であり、真の陽性率(感度)を 75% に設定し、核面積  $67 \mu\text{m}^2$ 、核長軸径  $10.7 \mu\text{m}$  をカットオフ値とした。核面積を  $67 \mu\text{m}^2$  未満 (A 群) と以上 (B 群) の 2 群に分けたところ、5 年生存率 A: 90.4% vs B: 57.7% ( $P=0.0001$ ) であった。また長軸径を  $10.7 \mu\text{m}$  未満 (C 群) と以上 (D 群) の 2 群に分けたところ、5 年生存率 C: 88.6% vs D: 61.8% ( $P=0.0002$ ) であった。有意な差を認め、核面積  $67 \mu\text{m}^2$ 、核長軸径  $10.7 \mu\text{m}$  をカットオフ値とすると感度 0.75 で組織型を考慮しなくとも核グレード判定のみで 5 年後の生存を予測することが可能であった。